

広島女子殺害1年 命の大切さ訴え、決意新た

父「だれかを救えるなら」



事件から1年。現在の心境を語る木下建一さん（広島県海田町で）

広島市で昨年11月22日、下校中に殺害された小学1年木下あいりちゃん(当時7歳)の父建一さん(39)は、読売新聞のインタビューに応じ、「あいりとの思い出を語ることで、だれかを救えるならば」と話し、癒えるはずのない悲しみから必死に立ち上がり、幼い命の大切さや性犯罪の悪質さを訴えていく姿勢をみせた。来春にも始まる見込みの控訴審に向け、1審・広島地裁で無期懲役を言い渡されたホセマヌエル・トレス・ヤギ被告(34)に対しては「真実を話し、命をもって償ってほしい」と訴えた。

建一さんは毎晩、仏前であいりちゃんが好きだったキャラクターの家を組み立てる。小さな部品を手際よく並べられるようになった。「目が覚めたら真っ先に、おもちゃが少しでも動いていないか確かめてしまう」と打ち明ける。

月命日には、遺体発見現場で手を合わせ、通学路を歩く。「あいりが亡くなった一番の原因は犯人。でも、私が無理にでも別の場所に転勤していれば、こんな目に遭わなかったかもしれない」と、今も後悔の思いは消えることはない。

幼稚園の弟(5)はヤギ被告がテレビのニュースで映ると「この人嫌い」などと、姉の死を理解し始めた。

「家族がいたから耐えられた。でも、いつまでも悲しんでいたらいけない。あいりの分まで、息子に愛情をかけてやりたい。それが生きがいになっている」と、現実の生活と向き合う。

建一さんは「子どもに性的暴行を加えて無残に殺したことは残酷非道な重罪だ。悪魔のせいにして逃れようとせず、命をもって償ってほしい」と語る。

(2006年11月22日 読売新聞)